慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十二年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第九十八号）

目次

親鸞聖人の真面目……近角常観…(1)
大経五悪段講話……福島政雄…(5)
死線上の実感……高橋賢一…(11)
仏燈をかかげる……松本解雄…(13)

第九卷　第五號

親鸞聖人の眞面目

近角常観

一

近頃（大正十二年頃）、親鸞聖人を題材とした色々な戯曲や、小説等が多く出たが、何れも聖人の真面目を伝へてゐないやうに見える。世間に行はれてゐる作物は、一般に親鸞聖人の伝記等に現はれてゐる人格思想等を外部から眺めて、その現はれを強ひて真似ればよいと考へてゐるやうである。

譬へば、ここに水があれば、これを私が飲んで非常に気持がよいといへば、それを飲んだ真面目が現はれてゐるのであるが、これもほんたうに飲まないでゐながら、唯飲んだ者の様子を外から眺め、その真似をして、甘いといつても、それは単に真似であつて真の味に徹してはゐないのである。世間の人が親鸞聖人を見るのはこれと同じである。

一例を云へば、歎異抄の六条に『親鸞は弟子一人ももたず候』とある。ここに聖人の如何にも謙遜なる御姿があらはれてゐる。さうするとこの御姿を眺めて、かくの如く謙遜にすることが信仰の故だと解してゐる。果ては、吾々もかう謙遜にしなければならないのだ、又は謙遜にすればよいのだと考へて来る。現に一燈園などの生活が、つとめて他人の下に出ようとし、所謂「下座を行ずる」といふことをする。然しかくするのが信仰なのだと思つて、力を入れて勉めるのであつて見れば、それは聖人の所謂、謙遜といふやうな態度を外側から眺めてそれを真似ることにすぎないのであつて、そんな処に聖人の信仰があるのではない。

もとより世間一般に奢侈に流れ、怠惰に陥つてゐる時に、自分の身を質素にし、他人に親切を尽して仂くなどといふことは、いかにも殊勝のことのやうである。然し自分はかうして社会奉仕をしたのであるとか、又は懺悔の生活をしてゐるのであるとか、さういふやうに言ひふらすならばそれはすでに真実の奉仕からも懺悔からもはなれてしまつてゐるものであつて、かかる処には真実の信仰が動いて

はゐないのである。

これみな信仰から現はれる外側の姿を真似て、ここに力を入れて顚倒の所行におちいつてゐることなのである。例へば、親鸞聖人は家庭的宗教を開かれた方であるといひ、自ら煩悩具足と言はれ、罪悪深重の凡夫と言はれた方であるといつて、茲に聖人の信仰は直に吾々の生活を肯定し、このままの人生を許容する煩悩肯定、絶対是認の宗教であると解し、随つて吾々が何等の規則もなしに、欲望の動くままに生活するのが、信仰的生活であるなどと考へてゐる者がある。

これも亦真に水を飲まずしてこの水は甘いといふ者のやうに、真に聖人の信仰を経験せずして、唯その言葉や、伝記やの、外部のあらはればかりを眺めて、それを自分の我儘な考へで推測して、彼此と言つてゐるにすぎないのである。行き方は放縦に流れて前の修養的のとは正反対になつてゐるけれど、どちらも同じく親鸞聖人の真面目を理解せず皮相の見に踏み迷うてゐるといふ点で等しいのである。

二

然らば親鸞聖人の真面目は何処に存するか。

先づ歎異抄に『親鸞は弟子一人も持たず候』とある。全体聖人ほど明かな弟子を多く持つてゐられた方は稀であるのに、弟子一人も持たずと何故言はれたのであるかといふに、これは世間で所謂、謙遜だなどと外側から許り見て片づけてしまふべきことではないのであつて、真実にわが力にてこの人々に念仏申させたのではないから、どうしても自然に弟子などと呼ばれないのである。

今ここに信仰に入らうとしてゐる人がある。その人を信仰に入れようとして私がいくら努力をしても、私の力でその人を信仰に入れ得るといふことはどうしても出来ない。

現にこの人こそは必ず信心を獲らるべき方だと思つて一生懸命に話してみても、どうしても感じない人もあるし、さうかと思ふと、信仰に入りさうもない人が案外に一寸した機会で入ることもある。この消息は『ひとへに弥陀の御催しにて念仏申し候』といふことであり『わがはからひにて人に念仏申させ候』ことの不可能を語つてゐるのである。故に、自然と『親鸞は弟子一人も持たず候』となつて来るのである。その信仰を頂かずして、その外観のみ真似ても致し方はないのである。

親鸞聖人は真仏弟子といふことを言はれる。それは信仰を獲た者は、真に熱い火に触れたのであつて、触れもせずに火は熱いと騒いでゐる者とは異るのである。その異る処に、火に触れて自ら感じた所に『真』といふ語を用ひらる

るのである。

全体親鸞聖人の御言葉を拝読すると、聖人御自身の始めて思ひ附かれて言ひ出された箇所はすくなく、古昔からの聖人の御慕ひになる方々の言はれた御言葉をそのままに繰り返して用ひられたところが多くある。然しそれ等は何れも単なる繰り返しや模倣やになつてはゐないで、皆到る処に聖人御自身の独創的な生命が現はれてゐる。これは何故かといへば、唯聖人自らが真実の信仰に生きられたから、真に熱い火に触れられたから、自然にさうならざるを得なかつたのである。

世間的には自分の実際もつてゐると思はれる価値以下に自分を置くのを謙遜といつてゐる。然るに聖人にあつては実際自分の方は絶対的に無価値なものである。父母孝養も出来ないのである。真実なるものは仏の慈悲のみである。身体の冷い者が火に触れて熱いと感ずる如く、私共が慈悲に触れて念仏申すのである。罪深い者は仏の恵みによりてのみ救はれるのである。然るに現今流行の「親鸞」においては、この慈悲が現はれてゐないのが多い。唯その外面のみを眺めて物真似をしてゐるのが多い。そして信仰をさへ自ら実験せずして他から借りて用ひる類なのが多い、これでは親鸞聖人の真面目は見られるはづがない。

三

然らば仏の恵みとか、慈悲とかいふものは何であるか。恵みとか慈悲とかいふ言葉は常にききなれてゐることであるが、それをハッキリと頂くことは難かしい。

或は仏とは何ぞやと、これを哲学的に考へて、宇宙の本体であるとか、実在であるとか答へ、そしてその本体又は実在の現はれが、即ちこの現実の世界、この日常の生活であるからといつて、山川も、草木も悉皆が一々慈悲の現はれである。かくの如き慈悲を有難く感謝して生活するのが信仰生活であるなどといふ者がある。然しこれはすべて自分の頭の中で理智的に作りあげた仏であり、自分の胸に強ひて有難く感謝すべきものだと築きあげた慈悲であるから、自分の生活が順調に行つてゐる間はそれでよいやうであるが、現実生活の上に一度つまづきが生ずると忽ちに崩されて了ふのである。然るに真実の慈悲に醒めたる者にあつては、かくの如き如何なる動揺にあつても崩されない。

子を失つて物足らなく感じてゐる人がある。側からこれを叮嚀に悔んでも、諦めろと言つても親の心は満たされない。たま〳〵同じ経験をした人が出て来て、その人の心を察し、憐み、悲しみ、語り合ふ時に、その人の心は慰められて軽くなるのである。仏の慈悲とは無限の同情である。

絶対に私の心の奥を見抜いて『汝はいかにも物足りないであらう、その物足りなさを我は案ずるぞ』と呼んで下さるのである。この絶対的同情の実現が仏なのである。仏は決して所謂、実在とか、本体とか、勿論また現実の生活そのものとかいふのではなくして、唯いはば偉大なる意志の顕現である。絶対の人格である。其故に仏には本願といふことがあるのである。本願とは、吾々の欠陥を見抜いて、同情し哀愍し、必ずこれを救はずんばやまずとお誓ひ下されお仂き下さることを現はしてゐるのである。この本願がなくしては仏でないのである。然るに、この仏の根本的の性質である本願といふことを顧みずに、其他の色々の性質を哲学的に考へたり、芸術的に呼んだりしてゐても、それでは信仰を離れてゐるのである。勅語が陛下の思召を現はすものである如く、救ふといふ本願は仏の同情心の現はれである。吾々の心の奥を見透して同情して下さる、その本願に触れなくては所詮不徹底に終るのである。

元来仏とは、他の言葉では現されないので、実在といつても、本体といつても、それらはすべて仏といふ言葉で現はされるものとは別者である。

或人がかつて信心の人に向つて『仏とは何者であるか』と問うた。その人の答は、唯仏の慈悲をのべ、念仏申すのみである。問うた人は『それでは説明にはならない。仏の何者であるかを説明するのには、仏といふより他の言葉を以てせねばならぬではないか』と云つて憤つた。この人後に信に醒めてより当時のことを省みて、自己の無慚無耻を知り大いにわびたといふことである。

仏は他から説明されるべきものではなくて、体験さるべきものである。しかしてその体験とは、その本願を、その慈悲を、その無限の同情を、実感することに他ならないのである。要するに、仏の慈悲に触れることが根本の問題なのである。さうでなければ聖人の生涯は到底理解されないのである。この理解なくして唯単にその伝記を見て、外側からその様子をえがいたり、真似したりしても、終に聖人の真面目は得るに由もないのである。これ皆誤解である。

法蔵第三百八十号より跋

春蚓帳

近角常観

昭和七年十一月十一日。涅槃経の善巧の句議歎異抄第九章と同意なるを感じ作有り。

為阿闍世王　不入涅槃章

善巧大聖涙　矜哀無尽蔵

大経五悪段講話（一）

福島政雄

今まで引き続きまして、この大経の御話を、大分とびとびのところにもなりましたけれども、ズーと初めからお話をさして頂きました。私が仲々思ふやうにこちらにあがることが出来ませんものですから、今晩はこの、今読んで頂きました五悪段、ここを問題にして、私の種々な感じを申し上げまして、これでまあ、大経のお話を一段落にして頂きたいと思つて居ります。

で五悪段と申しますといふと、これは五つの悪といふのが、儒教の方の言葉で申しますれば、仁義礼智信と、この五つに叛いてゐるのが五悪と、斯ういふことを御講師の方方は仰言るのであります。

成程その通りでありまして、第一の悪といふところは、殺し合ひといふのが重なことになつて居ります。殺し合ひをするといふのは、一番この仁といふことに叛いてゐるのでありまして、それから第二の悪といふのが種々ありますけれども、欺し合ひといふやうなことが大分云はれて居りまして、人を欺す、そして自分だけ利益をしめるいふのはこれは義にそむく、正しい筋道ではないと、かういふことになつてをります。

それから第三の悪は礼にそむく。礼といふのは種々御座いますけれども、非常にこの大事なこととしては、男女の間といふものが礼を守らなければとんでもないことになる。それで第三の悪には、男女の問題と、ことに男に対して、釈尊が仰言つてゐるのでありますが、この問題が主になつてゐるやうであります。

それから第四の悪といふのは、智にそむく、智といふのは智慧といはれる。その智に叛くといふことでありませう。これも種々なことを申されてありますけれども、これは非常に傲慢無礼なこと、自分だけが権力を握つて他の人達を思ふやうに追ひ使ひたいといふやうな、その権力欲のことが大分出て居ります。さういふ自分独り威張りたがるといふのは、本当は智慧の無いわけである。これについては、私、西洋のことでありますけれども、昔のあのソクラテスといふ人、あの人のことを随分打ち込んでしらべたことがありますが、ソクラテスは本当に、この自分が何にも解らぬと、智慧の問題ではすつかり駄目であるといふことが解つてゐた人でありまして、それだから随分鋭い議論をしてもおしまひには相手がたとへば閉口しても、いや実は自分もそのことはよく解つて居りませんと、お互にまだまだよくこれを考へて行かうではありませんかと、ソクラテスも亦相手の前に頭を下げるといふやうな人でありまして、ほんたうの智慧の人であります。つまり智慧の人といふのに微塵も威張るところがない、飽までも自分が駄目であるといふことに目の醒めてゐるといふ人が智慧の人である。それが第四の悪といふのは大いに威張るといふのであるらからして、これはこの智慧のない人であるといふことになるのであります。

それから第五の悪といふことになりますと、これはまた種々のことが出て居りますけれど、今の仁義礼智信の信と、信はまことと読んでありますし、それから日本の古い、日本書紀といふ本を読んで見ますといふと信といふあの字をまことと読んでありまして、うけると読んであります。さうでありますからして、信といふ言葉ひとつで、まことをわが身にうける。仏教の上で申せば仏様のまことを我身の上にうけると、かういふ意味が信といふ言葉一つに籠つてゐるのでありますが、第五の悪となりますと、第一親にはそむく、大酒を飲む、うまいものばかり食べたがる、バクチを打つ、そして何一つとして善いことはしないで、親類も家族も、みんなでかういふ人はもう死んで貰つた方がいいと思ふ程だといふのでありまして、ズーとかう、まことのない悪さといふものをおのべになつて居りまして、おしまひには善人は善い行をして、明るい世界から明るい世界に入つて行く。悪人は悪いことをやつて、暗い世界から暗い世界に入つて行く。誰も知るものはないと思つてゐるけれども、仏様ばかりはこれを見徹しておいでになるといふ、あゝいふ御言葉がありますのであります。

さういふ次第でありまして、この五悪段といふものは、仁義礼智信にそむく人間の罪悪、又は煩悩といふものを、ことこまかにお示しになつて居ります。

ところが私は二十歳前後の頃にはキリスト教の聖書といふうちでも、始めの福音書といふものを相当感激して読んで居つたものであります。御承知の通り、あの第一の福音書のマタイ伝といふ中に、有名なキリストの山上の垂訓、キリストが山の上にのぼつて、弟子達にしみじみと教へ誡められる、山上の垂訓といふのが有名なのでありますが、この山上の垂訓を非常に二十歳位の時に、感激して読んだものであります。

ところが何時も申します通りに二十六歳の夏から、親鸞聖人のみ教に転じて参りました。それから段々この大無量寿経にもすこしづつしたしむやうになつて、その親しみの始めが、私はこの五悪段でありますし、その五悪段のうちでも、この第五の悪であります。

前にも申し上げたやうに思ひますけれども、私が二十七歳の三月十一日の夜であつたと思ひますが、母が私の結婚のことをきめるために、東京まで上つて来てくれて居りました。

ところが私は母から非常に可愛がられて育つたものでありますからして、母がはる〳〵熊本から東京に上つて来たとなれば本当にこの、それこそ踊躍歓喜ともいふやうな、おどり立つて喜ぶべきはづでありますのに、その時一向よろこばなかつたのでありまして、そして母に対して隔て心を持つて居たのであります。

それは実はウソのやうな話でありますけれども、二十六歳の夏に信心の道に心が開けたならば親に対しても、隔て心なんか持たなくなるとお思ひになるのが御尤もでありますけれども、実際のところはそれに反しまして、恥しいことでありますけれども、母に対しまして隔て心を持つてゐて、チットモ私の思ふ通りのことが母に対して言へなかつたのであります。

ところが十一日の晩に友達のところへ行つて、夜おそくまで話しあつてゐて、確か夜の十二時近くに帰つて見ますと母はもう寝んでゐます。私は小さな御厨子を開きまして、そしてこの真宗聖典をパッと開いて、御仏前に読み始めましたところが、今の五悪段の、第五の悪の一番初めのところでありまして、この世の中には、よくない人間がある。非常に怠け者で、チットモ家業に励まない。それであるから家族もみんなは飢え凍えるやうな有様になつてゐる。それをその親が見るに見かねて、お前はそんなに怠けてゐてはいけないぢやないか、もうすこし家業に精を出したらよからうと云つて聞かせますといふと、その親に対して、「眼を瞋らして怒りこたふ」で、おこつた眼付をもつて、おこつた言葉でもつて、口ごたへをする。さうなつて来ると親子と言ひながら仇同志のやうなものである。そんな子供は無い方がよいと云ふのが、今お読み頂いた第五の悪の初めのところであります。

不思議にそこが開けて、それを御仏前で読んで居りますといふと、その時始めてでありましたが、あゝここはよそごとではない、私のことだとかう感じましたのでありまして、それから段々、段々、先の方に読んで参りました。

ところが前に読みました『善人は善を行じて明より明に入り、悪人は悪を行じて暗きより暗きに入る。誰かよく知るものぞ。独り仏のみこれをしろし召せり』といふところを読みましたら、スッカリ私のことを書かれてあると感じ

まして、その時まあ若くて純な心であつたからでありませう、御仏前に泣き伏して了つたのであります。

ところが不思議なことには私の心がひらけたと申しますのは、翌る日になつて見ると、母に対する隔て心が無くなつてゐる。さうすると結婚問題についても、私の言ひたい放台言へることになりまして、この人はどうでありませうか、あの人はどうでありませうかと、云へるやうになり、母の方も、この人はいけない、この人も悪くないけれども外にありはしないかと言ふやうなことを、両方から自由に言へるやうになりまして、そして、母が五ケ月東京に居りました間に、私のその問題を解決してくれましたのであります。

さういふことなのでありまして、あの善導大師が、法の深信、機の深信、皆様お聞きになつて居られませう、あの法の深信といふのが、仏様のお慈悲が身にしみると、機の深信といふのが自分の浅間しい姿が見えて来るといふのでありますが、どうも法の深信とすぐ裏づけて、機の深信がすぐあるはづでありますけれど、私は、二十六歳の七月十一日の時に法の深信といふものが開けて、機の深信といふものにまだ眼が醒めずに居たのぢやないかと、今から不思議に思ひますのであります。二十七歳の三月十一日の晩に始めて、第五の悪といふいふところで、私の機の深信といふものがひらけたのぢやなからうか、チット離れ離れのやうでをかしいやうでありますが、実際の問題といふものはさういふことでありました。

然しその時から、親に対しての心持もすこし変つて参りました。それからこの五悪段といふものが、他人事でない。そしてそれが今申しましたキリストの山上の垂訓と同じ問題にふれてあるところもありますけれども、然し乍らまた余程おもむきが違ふといふやうなことを、それから後十年、二十年経つたうちに段々と解つて参りました。

初めのうちは両方同じ問題にふれてあるな、といふやうことばかり考へて居りましたけれども、繰り返し〳〵この大経下の巻、悲化段から五悪段にかけて拝読して居りますといふと、成程、同じ問題に触れて居りますけれど、非常に違ふといふのは、このキリストの山上の垂訓は、丁度兄さんが弟を鞭で打つやうにして、お前はこんな悪いところがある、こんな悪いことぢやないかと云つて聞かせてゐるやうな気持であります。

それからこの悲化段から、五悪段にかけて、繰り返して頂いて居りますといふと、これはこの親がしみ〴〵と子供に言ひきかして下さつてゐる。それがフト私が子供の立場で、さう言つて下さる親様の顔を見上げてみると、その親様の眼に一杯涙がたまつてゐる。ここはこのキリストの山上の垂訓と違ふところぢやないかといふことを段々はつきり感じますやうになりました。

その一つの著しい例を申しますといふと、第三の悪、第三の悪は、今お読み頂いたやうに、主に男に対しましてでありますけれども、どうもこの世の中によくない人間がある。始終この心の中には姪らなことばかりを考へてゐる。そして出ても、入つても、みめ美はしい女なんかに眼をつけて、そんな女に出遭ふと、ながし眼で見たりなんかする。それから自分の妻といふものは珍らしくないから、そつちのけにして、そつと女を他に囲うて居つたりする。さういふ御言葉であります。

さうするとキリストの方はどう申しますかといふと、女を見て色情を起すものは、中心すでに姦淫せるものなり、若し汝の眼、汝を地獄におとすやうであつたなら、その眼を刳り抜いて了へ。汝の手が汝を地獄におとすやうであつたら、手を切つて了へと、非常にきびしいのであります。同じ問題でありますが、さうすると、キリストの教の方では、どうしても、そんな姪らな考へを断ち切つて了はねばならぬぞ。そんな姪乱の塊のやうではならんぞ、眼をくり抜いてもいい、手を断ち切つもいい、立派な心になれ、かういふところであります。

それから釈尊の方は、お前はさういふ姪な心ばかりで、到底お前はよくなりやうは無い。到底よくなりやうのないお前ぢやから、自分としてはそれが可哀想で、可哀想でたまらぬ。何処々々までもお前のその姪らな心がとけて了ふまでは自分はお前を見捨てない、何処々々までも自分の心を御前に注いで行くと云つて下さつてゐるのであります。

さうすると私のこととして考へますといふと、どちらに落着けるかと申しますといふと、キリストのやうに云はれると、成程自分と云ふものは、そんなものだと思ひますけれども、キリストの言はれることは怖いのであります。そして私の心持で申しますれば、サア、眼をくり抜いたからと云つて、自分のそんな心が改まるであらうか。手を切つて了つたからといつて、自分のそんな姪らな心が無くなつて了ふであらうか。これはこの考へものだ。成程キリストの申されることは尤もであるけれども、自分のこの蛇のやうにまつはりついてゐる愛欲煩悩といふものが、仲々この一遍に転じて立派なものになるものぢやないと思ふものでありますからからして、立派な教と知りながら、どうしてもこのキリストの教、さういふ言葉によつて救はれない。

ところがこの釈尊の教は、今のやうでありまして、お前は到底よくなれるものぢやない。到底よくなれる者ぢやないから、尚更ら見捨てることは出来ない。お前の乱れた心が何とかなほるまでは、自分は何処々々までもお前につきそうて、そしてお前の心をとかすまでは決して見捨てないぞ。さうして涙をもつてさう云はれて見ますといふと、愛欲煩悩の塊である私が、段々ととかされて参ります。かういふことになるのでありまして、実際問題として、私が四

十三歳の夏、七月二十五日、高松から何里か離れて居ります塩之湯といふところに、近角先生の御話をよく聞いていらつしやつた弁護士の酒見忠勢といふお方に連れられて参りまして、そしてその酒見さんから、句仏上人の問題のお話を聞きました。酒見さんは何気なくお話しになつて居られました。

『句仏上人といふお方は堕落した方である。もつとも随分お気の毒で、もと坊ちやん育ちであつたものを、囲りに悪い者があつて、お酒を覚えさせる。女遊びを覚えさせるといふやうに、段々誘惑して堕落させたのである。そしてあんなことにおなりになつたのである。

ところがその堕落してゐられる上人を飽く迄も近角先生は立てて、上人のために生命がけに、全国を歩き廻つて仏いておいでになる。あれは人間業とは思はれない、仏様のお仏きといふものがこんなものかと思ふ』

と酒見さんが何気なく話して居られました。それがピンと私の胸にひびいて来たのであります。いや句仏上人の問題ぢやない、私の問題であるといふやうに、その時気がついて参りまして、それからであります、それからさういふ方面、愛欲煩悩といふことについて、自分が愛欲煩悩の塊りのやうなものであるといふことに目が醒めますと同時に、すこし、どうやら、その方面の心持が、何と申しますか、すこうし薄らいだと申しますか、遠のいて参りましたのであります。

このことについては、私が極く懇意にした人で、今は世に亡き人でありますけれども、大阪で小学校の先生を勤めてゐた柳川君が、これはまたしたたかの男でありましたが私がさう云ふ心持がすこし変つて来た時に、何も私を試験して見る積りでもありませんでしたが、その頃流行のやうでありました、電灯を一寸暗くしてあるやうな喫茶店に私を連れて行きまして、若い女給を相手さして、私に話さして、私の様子を見てゐるのであります。そして成程先生も心持が変りましたね、と云つてくれたことを思ひ出すのであります。

矢つ張りその頃からすこし心持がひらけて来たかと思ふのであります。尤も人間のことでありますからして、それはひらけ始めたと申しましても矢張り死ぬるまでは、何かそこにあるといふことはまぬがれませんかと思ふのでありますが、けれども、兎も角、その頃からすこうし変つて参りました。

そんなことで、第三の悪と云ふところが、この釈尊の御言葉でなければ救はれない。外の方ならキリストのその非常に強いところで救はれる方もありませう。私は結局、第三の悪といふところの釈尊の御言葉によつてどうにか救はれて行くといふ、これがその第三の悪に対する私の心持であります。

未完

死線上の實感

高橋賢一

〔一〕

昭和十三年夏、九州太刀洗飛行場から北鮮に双発機を空輸するため、整備係下士官一名を同乗させ、私が操縦して飛行中、丁度朝鮮海峡の真中附近の上空三千米で、突如として両エンジン共に停止。

はて何事ならんと、あれこれ原因を思ひめぐらしてゐる間にも機はグングン下降して行きます。下は見渡す限り白波立つ海面。舟も島も見当らず。数秒後には海没して死ぬことは必至。

『畜生！これで俺もとう〳〵お陀仏か』

と思ひました。後方席の下士官と伝声管を通じて連絡の結果、彼が太刀洗を出発の際、燃料コックの切換へを誤つたことに気付いて呉れましたので、コックを切換へさせ、私が手動ポンプを操作して燃料を送り、海面に達する前に再びエンジンが唸り出して事なきを得ました。

〔二〕

昭和十四年春、北鮮の飛行場で編隊の夜間飛行を終り、私は編隊長として最初に着陸し、地上滑走で、飛行機を格納庫の近くまで持つて来ました時、二番機が、着陸地帯標示灯を誤認して、着陸方向が狂つたため、猛スピードで私の飛行機の真正面に突進して来て衝突し、両機共に死傷者が出ました。

此の時は、暗闇の中から不意に大きな魔物が眼前に立ちはだかつた感じで、ハッと思つた一瞬、頭部強打のため人事不省となり、死を予感する暇もありませんでした。

〔三〕

昭和二十六年、四月十三日。青森県八戸市。妻は前年十一月から療養所に入院し、私と中学二年の伜と二人で、妻の実家に寄寓中のことでした。

朝、起床しようとした時、昭和二十二年五月に次いで、第二回目の喀血が始りました。今度は前よりも程度がひどく、一寸体を動かすとその度に喀血し、隣室に眠つてゐた

伜が驚いて、タオルを持つて来たり、ボロを持つて来たり、看病に大童でした。

呼吸は促迫し、貧血のためからだがガタ〳〵慄へ、素人考へで、此の調子では危いなあと思ひました。

此の期に及んでは、妻や伜に何か言ひ遺す気にもならず、来し方、行く末、此の世の一切が、空々漠々。唯一筋に『是真におわすみ仏』を憶念するばかりでした。

今日、当時を回想します時、たとへ陋巷に独り窮死することがあつても、仏光の照耀する処、たちまち荘厳の浄土。人身の享け得る幸慶、これに過ぎるものはないと思ふ次第であります。

昭和三十二年四月二十一日。稿了

後註。 高橋さんは岐阜県の出身。陸軍航空少佐で終戦。追放。しばらく故郷に帰られ、唯一の財産として残る健康をたのんで生き抜かねばならぬと決心せられ、大垣の渡辺種彦さんの瑞穂工芸に職場を見出されたけれど、昭和二十二年五月、大喀血。その頃から仏書に親しまれ始め『世間虚仮、唯仏是真』の聖徳太子の根本精神に参会せられるに及びました。現在は川崎市登戸一八四一番地に住まれ、体力も恢復ぜられて通訳官をして居られます。子供さんは大学に入られました。

聚墨生

成徳院光沢抄

『称我名字と願じつつ』と和讃にあるが、この時は、我と云ふ字に気をつけよ。どういう仏であるかと、仏願に目をつけ『汝の親であるぞ、母と呼べ』とある御慈悲を頂くのである。

○

地獄と極楽を一処にして無いと云ふが、それは間違つてゐる。地獄は自分に造つてゐる。自業自得である。極楽は願力成就の報土である。信心の智慧を得ると、地獄も極楽も自覚するやうになる。

○

如何にして信ずるかと、自分から信心を起さうとしてゐるが、それは駄目である。足べしふんで天に登らんとあせると等しいことである。いつまでたつても駄目であるから、仏が我が傍まで降りて来て、われをたのめ、と久遠このかた呼びづめである。このいはれに気付くのが名号のいはれを聞くことである。

○

信心は如来の決定心から発起す。如来の御手まはしの丈夫さを聞け。

愛知県尾西市三条、蓮光寺修道会発行。
撰者　中島彰悟。

註。成徳院。故住田智見講師であります。

佛燈をかゝげる（一）

松本解雄

私註。愛媛大学仏青の機関誌『蓮』に、顧問教授として寄稿せられたものであります。　聚墨生

我が愛媛大学仏教青年会が誕生してから一年有半、今回その機関誌第一号の発刊をみるに至つたことはまことに御同慶の至りである。この機会に我が国の仏教界の現状を概観し、その正しき在り方について少しく考へてみたいと思ふ。

今日我が国の仏教がどのやうな状況にあるか。その答はまことに遺憾ながら「萎微沈滞」の一言につきる。これはどんなひいき目に見ても首肯せざるを得ない事実である。成程、京都や奈良に行つて見れば、雲をつくやうな大伽藍がならび、幾多の国宝や、重要美術品としての仏像、仏画、建築、彫刻、其他貴重な文化財の世界に誇るべきものは枚挙にいとまがない。又各地の寺院は戦災のために多く消失したとはいふものの、既に旧に倍し復興したものすあり、又その途上にあるものもある。

以上によつて見れば、一見仏教は沈滞どころか、今尚、堂々たる威容を示してゐるかの如くである。然し、我々の今問題にしようとしてゐるのは、形ではなくして実である。仏教の仏教たる所以は、その豪荘な伽藍でもなく、すぐれた芸術的作品でもない。人間の抜き難き苦悩を解決すべき生きた宗教としての仏教、民衆の生活に直結せるところの仏教、それこそが仏陀の顕示された法の本旨でなければならない。特に民衆とのつながりについては、現在の日本に於いては、特別の地方を除いては全く民衆と遊離して了つてゐる有様である。地方々々にそれぞれ大小の寺院があり、先祖代々の寺檀の関係は、特に墓地、位牌堂などによつてその命脈を保つてはゐるが、それは葬式、法事などの儀礼を通じてだけのもので、仏教の本旨から言つてむしろそれは附随的のものでしかない。だから現在のやうなせち辛い世の中になつて来ると、かかる儀礼的なつながりは世代の更新と共に何れは断ち切られて了ふべき運命にある。仏教の既成教団は崩壊の一歩手前にあり、仏教の宗教としての機能は全く閉塞して了つてゐると言はれるのは、まことに理由のあるところである。

然らば以上のやうな仏教の現状を打開し、仏教をして本

然のすがたを取り戻させるためには如何なる方策をとるべきか。左にその一、二を述べてみることにする。

先づ第一に仏教の啓蒙運動の必要である。今日一部の識者を除き、我が日本に於いては、宗教に対して全く無関心である。宗教自体についての無関心は又仏教に対しても無智、無関心となり、仏教と言へば、死者、葬式と結びつけ、ひいては仏教とは、厭世的、消極的、逃避的思想なりとの誤解を暗々のうちに育ませてゐる。この誤解が根本にあるため、たま〳〵人生苦に当面せる者も、仏教によつてその解決をはからうとせず、徒らに迷信に走り、淫祠邪教の虜になるか、又は二ヒリズムに陥る。実に痛ましいことである。宗教教育を盛んにすることによりこれらの蒙を啓き、正しき仏教のすがたを知らしめることによつて、真の光に触れしむることが最も大事なことである。ただこのことに関して近来、文庫本など割に低廉な価格にて、相当権威ある仏教図書の出版されてゐることは喜ばしいことである。然し現在の程度では他の夥しい出版物に対して比較するのに寥々たる有様である。キリスト教は無料で聖書など配布してゐるが、仏教々団も少しく見習ふべきではあるまいか。

第二に僧職者の自覚である。教団は僧職者を中心として発展して行くのであるから、僧職者の活動如何によつてはその教団は或は盛んになり、或は衰へるといふことは今更言ふまでもない。一口に言つて今日の仏教々団の不振は僧職者の無自覚にあると言つても過言ではない。僧職者が真に良心的に目覚め、己の使命を認識し、僧職者としてまさになすべきことが何であるかに思ひ至るならば、只それだけでも、可なりの前進をみることが出来るであらう。

檀家数の多い寺は経済的には余裕があつても葬式法事に精一杯で、教化はそつちのけの有様であり、檀家数の少い寺院は寺族を養ふために、他に収入の道を講じ、僧侶とは名のみで、寺務は恰もアルバイトの観を呈してゐる。これでは教団が萎微沈滞するのも道理である、人或は言ふ。既成教団は何れ崩壊するであらう、それはすでに時の問題である。然し仏教は何も既成教団に限つたものではない。生きた仏教はむしろ寺を離れて存すべきであると。成程その通りである。それも一つの行き方ではあるかも知れない。しかし衰へたりと雖も今日の所謂既成教団の組織と伝統の力は無視することは出来ない。若しこの組織と伝統の力を有効に利用するならば充分その機能を発揮することが出来る。何も有用なものまで見殺しにする必要はない。又地方によつては素朴な信者が多数居る。勿論これからの人々にも手を差し伸べる必要がある。宗教は何も専門僧職者のみの専有物ではないが、最も望ましきは、僧俗一体となり、仏祖の遺教を現代に生かすことである。それには先づ僧職者の自覚が最も先決問題である。僧職者の自覚について具体的に如何にすべきかを更に細論する必要があるが、それは次回にゆづることにする。

続く

編集後記

青空に鯉幟の風にはためく五月、野も山も青葉若葉のむせかへる頃となりました。

自然は斯様に清く穏やかでありますのに、空からは原水爆の灰が降つて、そのとどまるところを知らぬ有様は誠に悲しい極みであります。

高山氏の著書に『人間至上主義になつて、神を拝まず、仏を捨てた人間の大反省の秋』といふことを力説せられてゐるのを読み、うなづかされるものを覚えました。

近角先生は『何が悪い、彼が悪いといふけれど、自分がよいと思ふことが一番悪いのだ』と独善主義、独断の邪見を強く誡められたとの由であります。この大鉄鎚の下に独善が崩れ、更に無定見の泥沼から大悲の引接をかうむつてそこに信心のひかりがかがやくことであります。

△聖人の真面目は、聖人の降誕会があちこちに執行せられる月に相当いたしますので、大正十二年四月発行の法蔵誌から近角常観先生の御講話を頂き、誌上の降誕会とさせて頂きました。丁度その頃、宗教文学が盛んになり、聖人を題材とされたものが沢山出来たことがありました。池山先生も『屋台にならべられた人形のやうに』と語られたことがありました。七百回忌の名のもとに又聖人が種々に宣伝せられて参りました。近角先生の御指示を仰いで聖人を拝しませう。

△五悪段の福島先生の御講話は、これ以上に言ひやうのないまで御自身を投げ出されて御話し下さいました。テープから写しとりました原稿をお送り申して、御訂正を乞ひました時『あまりに自分のことをさらけ出してゐますのでどうかと思ひましたが、外ならぬ慈光誌のこと故このまゝにしておきませう』とありました。皆様もこの点をよくお吸み取り下さるやう。身を捨てて説かれるといふことは斯様のことかと感佩いたしました。厚く謝しまつります。東京都調布市仙川町七九四番地が御住居であります。

△死線上の実感は高橋さんが実験されたそのまゝを記録して下さいました、慈光誌百号記念の原稿の先端をここに記載いたしました。

△仏燈をかかげる、は私の三十年来の信友、愛媛大学の松本さんが、同大学の仏青のために書かれたもので、私共の反省の鏡とさせて貰ひました。松山市南柳井町四一、坂口様方

（聚墨生）

御案内

六月五日(水)午后六時半。一道会館。大無量寿経に就いて

福島政雄先生

市電。新郊通一丁目下車、東へ一丁名鉄。呼続下車、東へ十五分。国鉄。笠寺駅。市電乗り換へ

第一、二、三、日曜午后一時半、一道会館講話。

第一日曜午后六時半、中区葵町、法善寺、輪読会。

廿四日午前午后、昭和区小桜町教西寺。法話会。

定価 一部 十七円（送共）
半年 百円（送共）
一年 二百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人 花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 奥川正生
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第九巻第五号昭和三十二年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十日第三種郵便物認可